秩父 今宮神社 奉賛会だより
（令和五年正月号）

令和５年 元旦

年頭のご挨拶

今宮神社　宮司　塩谷　崇之

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

平素は当神社に格別の御尊神と御篤志を賜りまして誠にありがとうございます。

令和五年の「癸卯」（みずのと　う）の年頭にあたり、中町奉賛会の皆様をはじめ、秩父地域のますますの隆昌と安寧を心よりお祈り申し上げます。

中国の古い思想「陰陽五行説」によれば、「癸（みずのと）」は「水の弟」つまり「水の陰」を示す文字。雨や露、霧など、静かで温かい大地を潤す恵みの水で、生命の終わりを意味するとともに、次の新たな生命が成長し始めている状態を意味しています。

また、「卯」は「木の陰」のエネルギー。草木が地面を覆うようになった状態を表し、萌え出る春をイメージさせる干支です。

よって「癸卯」は、「寒気が緩み、萌芽を促す年」。コロナ禍以降、停滞し続けていた世の中に、そろそろ希望が芽吹く春がやってくることを予感させてくれます。これまで積み重ねてきた自身の力が試される年でもあるため、最後まで諦めずに希望を持ち続けることが、道を開く鍵になります。皆さまに希望が芽吹く春が訪れることを心よりご祈念申し上げます。

さて、三年前から世界中を襲った新型コロナウィルスは、一度は収束の兆しを見せたものの未だ猛威を振るってはおります。しかし、私たちの不断の努力により、少しずつ日常を取り戻しつつあり、秩父地域においても、数年にわたり開催を見合わせていた数々の催事や伝統行事が復活し、昨年は三年ぶりに秩父神社の例大祭（秩父夜祭）での屋台・笠鉾の曳行も行われました。自粛つづきで活気を失いつつあった私たちの魂を奮い立たせる行事が滞りなく行われたことは大変喜ばしいことです。

当社においても、既に三年にわたり、恒例の祭典・神事を厳修しつつも、感染拡大防止の見地より、遠方からの崇敬者の参列をご遠慮いただくなど祭典の規模を縮小し、また奉納演奏や玉串拝礼、直会を省略するなどの対応を余儀なくされてきましたが、今年は、少しずつ従前の形に戻してゆきたいと考えております。万全の感染対策を整えご参拝の皆様をお迎えする対策を講じておりますので、皆様方にはぜひお運びいただき、神仏への祈りを共有して頂ければ誠に幸甚に存じます。

【白兎の絵馬奉納】

秩父第二中学校の美術部の生徒さんたちから、今年の干支「癸卯」に因んで、躍動する白兎を描いた立派な巨大絵馬をご奉納いただきました。

秩父盆地の雲海の上を元気よく飛び跳ねる姿はとても微笑ましく、参拝された方々の心を和ませてくれています。

奉納祭の様子は、去る十二月三十日の読売新聞（朝刊）にも掲載されました

巨大絵馬を奉納した秩父第二中学校の生徒たち＝27日午後、同市中町の今宮神社

躍動する白ウサギ

今宮神社 秩父二中が巨大絵馬奉納

秩父市中町の今宮神社に27日、来年の干支（卯（う））を描いた巨大絵馬（縦1・7メ、横2・4メ）がお目見えした。市立秩父第二中学校（同市上町）の美術部員9人が、秩父盆地に広がる雲海の上を元気よく飛び跳ねる一匹の白ウサギを描いた。

同校美術部の巨大絵馬づくりは2年目。昨年は迫力のあるトラをデザインし、同神社に奉納した。今年も正月前から部員同士でアイデアを持ち寄り、アクリル絵の具で完成させた。部長の沢山結衣さん（14）は「本物に近づけるよう、梅の木の配色などにこだわった」と話す。副部長の中野花菜さん（14）は「大満足の作品に仕上がった」と笑顔を見せた。

巨大絵馬は一年間、拝殿横に飾られる。同神社氏子総代の井上貞雄さん（78）は「昨年の作品同様、中学生が作ったとは思えないクオリティー」と絶賛した。（中野希美）

【今年度の行事予定】

◎立春祭（二月四日）

秩父神社では、毎年二月三日「節分追儺祭」が盛大に執り行われますが、今宮神社では翌二月四日に「立春祭」を執り行っております。

当社では、立春を迎えるにあたり、神職・崇敬者により新年一月五日より三十日間に亘る「寒行」に入り、二月三日（節分）を以って満行を迎え、二月四日の「立春祭」におきまして皆様のご安泰・ご開運をご祈願いたします。

立春祭にあわせて頒布される『立春大吉』の護符は、春の到来を喜び、災厄と招福を願うもの。当社では、数多の神々を産み給うた伊邪那岐（イザナギ）・伊邪那美（イザナミ）の二神のお力をもって春を招き入れます。

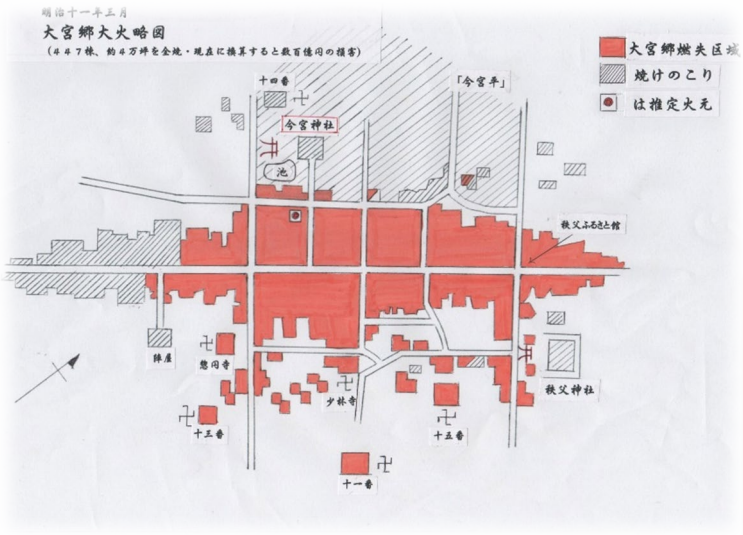
この護符は、左右対称で、表から見ても裏から見ても『立春大吉』と読めることから、この御札を貼っておくと、邪鬼が中に入ってきても、ふと振り返ると同じように『立春大吉』と書いてあるので、逆戻りして出て行き、一年間を平穏無事に過ごせるようになるという謂われもございます。

◎中町三社祭（三月二十一日）

地元中町会・東町会及び秩父市消防団による火伏（火難除け祈願）のお祭りです。

明治十一年（一八七八年）三月二十一日、中町を火元に発生した「秩父大火」は、秩父（当時は「大宮郷」と呼ばれていました）の市街地約四万坪四百四拾七棟を焼け尽くしました。

二度とこのような災禍の起こらないよう、翌年三月、今宮神社境内摂社に、火伏の霊験ある「秋葉大神」を祀り、以来百四十四年もの長きに亘り、毎年、大火のあったこの日、地元町会や消防団を中心として、火伏の神様（秋葉大神・古峯大神・三峯大神）に防災を祈願するお祭が斎行されます。



◎龍神祭（四月四日午前）

当社の霊池に祀られた八大龍王神のご神徳に感謝するお祭です。

龍神祭は明治元年の神仏分離令以来行われませんでしたが、平成四年(一九九二年)に復活しました。毎年四月四日午前に、龍神様を慕われる多くの氏子・崇敬者らの参列のもと、盛大に祭典が執り行われ、ご神前にて、巫女による舞や奉納演奏などが献上されます。

八大龍王神のご神徳への感謝とともに、世の中の安寧と五穀豊穣、氏子・崇敬者・関係者らの無病息災などを祈念いたします。

◎水分祭（四月四日午後）

水分（みくまり）神事は、秩父神社でおこなわれる御田植神事に先立ち、秩父神社に龍神池の御神水を授与する神事です

秩父神社から神官・伶人・作家老・神部らからなる御神幸行列が当社を訪れ「水乞い」を行います。当社の宮司から秩父神社に、当社の龍神の御分霊を『水麻（みずぬさ）』(龍神様の御神徳）として授与します。秩父神社は、この水麻を奉斎して秩父神社に持ち帰ります。

秩父神社では授与された水麻を、田の水口をかたどる「藁の龍神」の頭部に奉ります。すると、境内の敷石に龍神様の御神霊が行き渡り、そこは一面の水田と見立てられ、神部らによって御田植神事が執り行われます。

この「藁の龍神」は、毎年十二月三日の秩父神社の例大祭（秩父夜祭）の際、大真榊を立てる榊樽に巻き付けられ、神輿・笠鉾・屋台の行列とともにお旅所へ供奉されます。武甲山に鎮まる山の神が、春に里へ下って人々に豊かな稔りをもたらしたあと、冬のはじめに再び山に帰ることを象徴するもので、古代日本の祭祀形態を今日に伝えるものです。

◎役尊神祭（六月四日）

秩父霊場の開祖であり、また今宮坊の開基でもある役小角大神（役行者）の御聖徳を偲ぶお祭り。毎年、役行者の縁日である六月七日に最も近い土曜日または日曜日に、役尊神祠（行者堂）正面にて斎行されます。

明治政府の修験道禁止令以降中断していましたが、御神示により平成七年以降再び斎行されるようになりました。

祝詞奏上に続いて「特別護摩供」が執りおこなわれ、導師による護摩と読経の中で参列者による玉串奉奠を行います。神道神事にこのような神仏習合の形式はいまでは珍しく、貴重な祭祀のひとつです。

◎大祓神事（六月晦日・十二月晦日）

年に二度、六月と十二月の晦日(月の最後の日)におこなわれる神事で、半年間に身についた罪穢を祓うために行う神事です。夏の大祓を「夏越の祓」、冬の大祓を「年越の祓」と呼びます。

当社では氏子・崇敬者に予め配布した人形(ひとかた)に罪穢れや災厄を移し、火・水の霊力にて祓い清め、身も心も新たに、明るく正しい生活を続けられるよう祈願します。

◎例大祭（九月二十八日）

当社本殿に祀られている伊邪那岐大神・伊邪那美大神・須佐之男大神・宮中八神（御巫八神）の御神徳を仰ぎ、その御神恵に感謝するお祭で毎年九月二十八日に本殿にて斎行されます。

神々への礼拝を通じ、日頃のご加護に対し感謝するとともに、新たなる一年の無病息災を祈願いたします